

イチゴ‘まりひめ’における秋ランナーを利用した親株育成

和歌山県農業試験場

はじめに

和歌山県が育成したイチゴ‘まりひめ’は、高品質でブランド化され本県の主力品種となっているが、炭疽病に非常に弱いため、育苗中に発病して枯死する事例が頻発し対策が求められている。育苗時の対策として最も重要なことは、炭疽病菌に感染していない親株を用いることなので、まずは健全な親株を育成する必要がある。そこで、当試験場では、病原菌感染リスクが低い低温期に発生したランナー（秋ランナー）を利用して‘まりひめ’親株を育成するための栽培管理技術について試験を行ったので報告する。

秋ランナーの採取

- ・収穫ハウスにおいて、気温が低下する11月以降に発生するランナーを摘除せずに残し、子株の展開葉数が3枚以上になり発根し始めたら採取する（写真1、2）。採取が早く、子株が小さいと挿し苗時の活着率が低下する（図1）。
- ・採取したランナーは、ビニール袋などに入れ温度を保った状態で冷蔵庫（2～5℃）に数日間保管することが可能。



写真1 収穫株から発生した秋ランナー



写真2 採取適期の子株

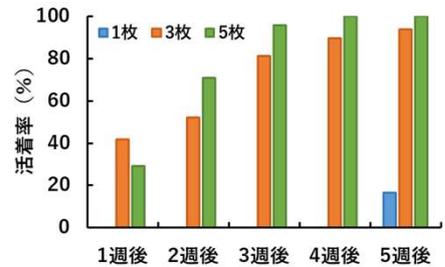


図1 子株の展開葉数が活着率に及ぼす影響
2023年12月14日に挿し苗し、無加温ハウス（サイド開放）で管理。活着までPOフィルムをべたがけ。

挿し苗方法

①水挿し

- 1)ランナーを長め（20～30cm程度）に残した子株を準備。
- 2)しっかりと湿らせた培土にランナーピンを用いて固定。
- 3)ランナーの切り口を水道水を溜めた容器に浸ける（写真3）。
- 4)水が減ったら継ぎ足し、かん水は葉の萎れや培土の乾燥が見られたら行う。
- 5)2～3週間後、活着を確認したら子株を水に浸けたランナーから切り離す。



写真3 水挿しによる挿し苗



②べたがけ

- 1)ランナーを短め（5cm程度）に残した子株を準備。
- 2)しっかりと湿らせた培土にランナーピンを用いて固定。
- 3)透明のビニル、POフィルム等をべたがけし、温湿度を保つ（写真4）。
- 4)培土が乾いたら、かん水を行う。
- 5)2～4週間後、活着を確認したらべたがけ資材をめくる。



写真4 ベたがけによる挿し苗

※挿し苗は、育苗ハウス等の雨よけ下で行うのが望ましい。
挿し苗時、エコピタ®液剤（ダニ防除）や殺菌剤による浸漬処理も可能。
遮光や保湿のためのトンネル等は不要。

上記2つの方法を比較すると、水管理の手間は必要であるが「水挿し」は「べたがけ」より効率がよく、挿し苗時期が11月下旬～12月下旬であれば2週間程度でほぼ活着する（図2、表1）。
なお、‘まりひめ’では、12月末までに1株当たり2、3本の秋ランナーを採取できる。また、秋ランナー採取による収量等への影響は見られない。

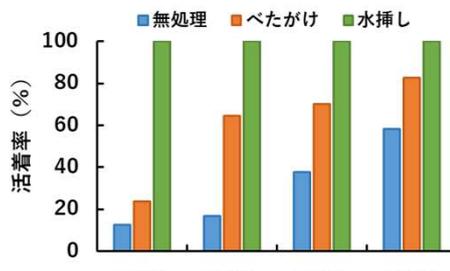


図2 挿し苗方法が活着率に及ぼす影響
展開葉数3枚で発根している子株を2023年12月7日に挿し苗し、無加温ハウス（サイド開放）で管理。

表1 挿し苗時期が活着率に及ぼす影響

挿し苗日	苗数	活着率 (%)					
		12/3	12/10	12/17	12/24	12/31	1/7
11/26	24	88	100				
12/3	47		81	100			
12/10	15			47	100		
12/17	7				43	100	
12/24	44					18	100

展開葉数3枚で発根している子株を2024年11月26日から12月24日に挿し苗し、無加温ハウス（サイド開放）で管理。挿し苗方法：水挿し

活着後の管理

- ・活着した苗は、1～2月頃にプランターに定植する。培土には緩効性肥料を混合しておき、点滴チューブ等の水はねが少ない資材を用いてかん水を行う。
- ・プランター定植後は、雨よけやベンチアップ等の炭疽病対策を施したハウスで管理する。

※ポットのまま置いておく場合、置き肥（IB化成S1×2粒等）をし、適宜かん水を行う。
露天での管理となる場合、葉が赤褐色化し生育は遅れるが、春には繁茂するので親株として使用可能。



写真5 プランター定植後の親株